

昭和二十年四月、陸軍歩兵第七十七連隊に入営し、

八月十五日平壤の部隊で終戦、武装解除、貨物船でシベリア抑留となった。途中列車の窓に幕をおろしてあるのでどこをどう通過したのか分からなかったが、十二月末アルチョムの炭坑の町に着いた。二十四年まで炭坑や伐採、農場での労働にしていたが、その間、年取った战友が衰弱し、次々と病死していった。牛馬同然に強制労働させられたことは、生涯忘れられない。弱になり気力がなくなれば死んでいく実情を宮田氏はしみじみと感じた。ウラジオストックでは、製材工場で労役。ここでは初めて、温かい気持ちで常にいたわってくれた職場長に出会った。昭和二十四年七月末、復員命令を受けた。苦節四年七カ月を経て、ようやく日本への引揚船に乗り移ったとき、地獄から娑婆へ抜け出した心境であつたらう。

異国の丘、岩壁の母の歌が流れる舞鶴港では温かい歓迎を受け、祖国の有り難さで感激する。復員して、教職の道に進みたかったがすぐにはできず、シベリアで死んだ気持ちでも試練と考えて土木人夫にもな

つた。

昭和二十五年四月、ようやく教員に採用されたときは、京城師範に入れてくれた伯父のお陰と心から感謝した。定年まで職責を全うし、生活の安定を家庭の平和を保ち得たことは、祖国の有り難さと感謝している。宮田氏はシベリア抑留から生還できたのは、気力と体力と、神仏の加護の三つだったと振り返るのである。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

北朝鮮から

鹿児島県 後藤 基 憲

終戦の前日昼過ぎ、駅前派出所の主任が私の事務所に入ってくるなり、「後藤さん戦争は負けました」と言うから、「何を言うのか、君は警察官だろう、流言飛語を口走つたらあかんじゃないか」とどなつたら、「いいや、後藤さん本当なんです。署長が日本人警官

だけを集めて、涙を流しながら話したのですから」

私は直ぐ様二階の工藤所長の部屋に駆け上がりその話を伝えたら、私は何も聞いていないが、局に電話を入れてみようかと連絡をとられたが、指示も指令も何もないとのことであった。明くる正午、天皇陛下の重大放送があるとの警察官の話などに十五日になってから我々は了解したのだった。

平壤から二百キロ離れた鴨緑江に近い北辺の江界のことだし、戦後各地であつたいろいろないざこざなどは全く無縁の土地柄ではあつた。

昭和十九年六月エンドウが突つたそのころ関東軍の参謀ら二十人くらいの一団が私服で後退作戦の検討とやらで江界に来られた。その帰途、国境満浦鎮の宿屋で、小・中学校同級で同郷だつた若松隆一参謀と飲み交わしたことがあり、戦争を身近に感じたのはそれくらいのものであつた。

「戦争は大丈夫なんだろう」

「大丈夫だよ」これが二度目のサヨナラになった。

二十三年十一月と聞いたが同君はソ連領コムソモリス

ク日本軍人捕虜収容所長として病死された。

江界での検討を終え八〇一列車で帰途につかれた参謀らを送るため、私は家内に命じて自分の官舎の畑に突つたエンドウ豆を全部収穫して塩ゆでにした。大ざるに取り上げて車内に持ち込ませて私も車内に乗り込み、皆さんを歓待しながら同行した。配給生活ではもてなしの方途はなかつた。

第一回の別れは十八年十一月、私が満州における民間防護の調査のため渡満した際、司令部に電話であいさつしたり若松中佐が乗馬で来るから大東樓飯店で待っていてくれとのことだった。

令婦人もこられ、初対面であつた私の家内とのあいさつや、戦中であつたので若松君の武運長久を折りお別れの酒宴となつた。

私の家内は遠く離れて会うこともない姉、妹たちに会うために同行したのだった。

新京から満州里行きの国際線に乗り完工駅ワシケンに降りたつた。

満州国完工国境警備隊長小玉光基氏は家内の妹婿で

ある。そのころ関東軍では満州国官憲とモンゴル要人との交流は要注意の時代であった。たまたまモンゴル一番の要人登爾雲登氏ドルジュンデンから完工隊長に招待の申入れがあり、ちょうど私たちが訪れる。

「兄さん、モンゴルもちよつと見ませんか」と言われ、承知したのだった。

登爾氏のおられるところはハルハ河沿いのホロンバイルだったろうと思われる。朝六時汽車で発つと昼前には着けるところだった。警備隊から角居白警尉スミイタヤシ補がロシア語、李さんが満語の通訳として同行することになった。

二頭立の馬車に枯れた秣をいっぱい積んで体が埋まるようにして、フェルト作りのカートンキという防寒靴をはき、防寒外套を借りて十分な支度で出発した。零下三五度くらいの気温であった。小高い砂丘を何回か越えて無事に凍結した河畔の蒙古包パウが点在する部落に到着した。登爾氏の包はすぐわかった。隊側からの連絡がなされていたのだろう、待つておられた。包内にはこの部落には一個しかないと聞かされたが、鉄製

のダルマストーブが乾いた牛糞を燃料にして勢いよく燃えていた。室内の三方に長持の箱が並べられすべての家財が収納されているらしかった。

令婦人と息子イツテ君（五歳ぐらい）登爾氏の令弟四人で心から接待していただいた。

長持から一本ずつブランデーを取り出して四本目も空にした大歓待であった。肴は山羊を一頭つぶしてブツ切りにし塩で味付けしてあった。箸はないので手づかみであった。

角井さんに、イツテ君に手土産がなかったかと言うと、ビール瓶の蓋があるといいのですがと言うけれど、それもない。私はちよつと思いつき、財布をあけ一昔前、安東市の盗品市場で買った絵銭を取り出し、これはどうだろうと差し出したらイツテ君大喜びで早速お母さんから糸を通してもらい首にかけた。煙草も喜びますとのことで箱ごとあげたら早速ちよつと火をつけ、うまそうにプカプカ吸い出した。蒙古には喫煙の年齢制限はないとのことだった。

ロシア語と満語とのやり取りは活発になされたが、

私と雲登氏とのイロハでの筆談はたどたどしいものであった。日常生活の質問のやり取りであった。戦争のことなど何一つ語られることはなかった。今、思い出して何か別世界での国際交流であった。

夕闇迫るころ、再会を約して別れた。令弟は馬で完工の隊長官舎まで送ってくれ、よちよち歩く私の長女に帯に巻き込んであった財布からお金を取り出し、三十拾円であったかと思うがくださった。

雲登氏は「私の包に日本人が来たのは貴方が初めてでした」と喜んでくれた。

この人が一九五一年ころのモンゴル初代主席であった。

戦局が進むにつれ、B 29の北鮮港湾爆撃は間断なく続けられ、その都度、我々は空襲警報下に退避壕の中だった。街の爆撃は幸い一回も受けなかった。

京義線の満州奇りの地区ではグラマンによる列車襲撃もたまには伝わるようになった。

江界管内では住民の厭戦騒乱など聞いたことはなかった。北鮮人の日本人に対する粗暴なまた悪質な行動

なども全然なかった。私どもは三十八度線を越えて南鮮に入る間いろいろな面で北鮮人の厄介になり、情けをかけられたことなど忘れることはできない。

終戦時江界在住の日本人は千八百人、交通局員は五五五人であった。ソ連軍進駐時新義州兵站部からの要請により、日本軍捕虜の員数合わせのため若者を出せとの命令によって軍人とは関係のない鉄道従事員の中から、自ら希望して新義州に向かった人数は入っていないので九日ごろの数字であろうと思う。

八月十九日ソ連軍の大部隊が三九年式の輜重車に鈴なりに乗り込んで江界に進駐して来た。皆、坊主刈りの囚人部隊であるとのことだった。兵員数は不明だったがものすごい兵隊であった。部隊侵入の一、二時間前に鉄道事務所に連絡将校であろう立派な軍曹が初めて見るジープに乗ってやって来た。ソ連進駐の通達である。

翌日二十日、日本人成人男子全員の集合抑留が始まった。遅れた者は銃殺との厳命であったので着のみ着のまま二百人ぐらいが郡役所の会議室に収容された。

ソ連憲兵将校の告示がなされた。

「三十八度線以北はソ連軍が占領した。ソ連軍は一般住民には何ら危害を加えない。ソ連軍による略奪暴行などはしない。万一ソ連軍によるそれらのことが行われたときは、直ちにソ連憲兵に通報せよ」とのことであった。実際には引揚げまでに二回傷害事件があったが、全く軍規は厳しいものだと思った。告示通りである。こそ泥や略奪などは数多くあったが命に別状がなければ憲兵に通報することはなかった。

ソ連兵は、万年筆をとつてもインクの出し入れも分からず、時計もタイムウオッチもわからず、ただそれらの物はリングと換えたり食べ物と換えたりするのに数多くすねて腕に付けたりポケットに押し込みさえすれば満足だった。抑留された翌日、ソ連下士官らしい者と朝鮮保安隊らしい者が室内に入って来て相談したいことがあるという。実は戦陣のこととて時計が役に立たんようになったから、この収容者の中から時計を寄付してもらえないかとのことであった。九人の者が腕時計を出した。私は懐中時計だったので、これは

駄目かと出したら、結構だと言って取り上げられた。しばらくしてから、今、時計を差しだした者たちはちつよと来てくれとのことだったので室外に出たら、保安隊らしいのが、貴方がたは家に帰ってもよいそうだから、外の者にわからんよう、こっそり帰ってくれと言われたり、それ以来何十日の間、私は収容所への差入れの後援者となることになった。一日収容された後、引揚げまでソ連兵と係わり合うことはなかった。もちろん引揚げのことでソ連と交渉したこともない。

成人男子で老人を除いて鉄道関係者十人が無罪釈放となつて助かった。しかし、釈放された者も収容中の者もすべてソ連軍の使役として収容所が解散になるまで何十日の間は駅に穀物の積卸し、木材の伐採など毎日使役はあった。

鉄道関係の食事差し入れのため婦人連中の官舎からトクロ江の橋を渡つて一キロ半の道行きは問題があるとの保安隊の意向によるものと思われるが、私はその婦人部隊の引率連絡のため一般使役からは免除され、鉄道員集団所に指定された合宿所で待機することにな

った。

昭和二十年八月二十五日ごろだったか、交通局の指示により交通業務の朝鮮側への引継ぎが行われ、すべて朝鮮側に渡され官舎のすべても使用は取り上げられた。しかし、朝鮮側の態勢が充足するまでは「空き」の官舎などは使用をゆるされた。

勝手知ったるかつての我が家に昼間からお風呂を沸かして入るぐらいはだれでもしていたことだった。ある日、その留守だと思ふ家に入っていく、ソ連のこそ泥がこの略奪作業を始めた途端、びっくりした散髪屋の奥さんが素っ裸で飛び出した。びっくりしたソ連兵、マンドリンの引き金を引いた。横腹をかすめたので血だらけになったが、それでも気丈なおかみさん、両手広げて「コノヤロー」と飛びかかりひるんだすきに、一目散に逃げ延びた。その後の後日談はないが、もちろん憲兵隊にはだれも報告しなかった。

街の日本人集団所には明治時代からの古い住民で有力者もたくさんおられた。その中には相当の猛者もふくまれていた。その集団所に無抵抗集団だと思つて、

ソ連兵が略奪に押し入ったところを、その中の猛者たちが捕り押さえ軍帽を取つて憲兵隊に突き出したところ、その場で処刑されたとの話があったが、在鮮中ソ連兵の暴挙はこれら二件だけと承知している。私の家族については三回略奪に遭つてはいるだけだ。一回目は時計だけ。二回目は携帯用蓄音機、背広上下。三回目夜具。夜具は部隊移動用貨車内シートとして持つていたものであった。

女を出せと保安隊を同行してのソ連兵酔っぱらいとは一晩、「マダムダワイ」「マダムはおらん」の繰り返し応答で大いに困った。幸い女たちは私の動作からそれと察したらしくそれぞれ伝令して、皆宿舍の裏手の台地（農地であつた）に逃げて寒さをこらえながらソ連兵が引き揚げるのを待ち、難を免れた。

三時ごろだつたらうか。やれやれと自分の個室に帰つて見たら家内と子供たち三人、家内の妹夫妻、独身のその妹、皆ぐうぐう寝ているじゃないか。これはどうしたことかとびっくりしたら、「父ちゃんがいるからと安心して寝とつた」と言うのには開いた口がふさ

がらなかった。

今晚は無事だったが、またあるぞと覚悟した。鉄道集団に満州から逃げて来たという婦人が二人、二十四、五歳であつたらうか、一緒に暮らしているうち、このようなことがあつた。うわさに聞いたがソ連軍の将校宿舎に行つたらいろいろと待遇もいいし、行つてもいいとの申し出があつたので希望通りにした。その後、ソ連側の婦人に対する問題がなくなつたように思えた。気の毒なことではあつた。

略奪や暴行などいちいち憲兵隊に言つてもしょうがないと思えたので被害の少ないことなどはぬきにして、ソ連兵とも往来の機会には「冗談の一つも言えるなどして、ともかく共存の姿勢でいるとソ連兵もまた「トウキョウ」「ダワイ」と言葉がかえつてくるようになる。つた。

十一月に入ると我々の收容所は既に解散になつていた。日本人は無職無収入だったので職を求めてどんな仕事でもしなければならなかつた。ソ連軍が使役したら賃金も、金でないときは代わりに食料をくれるよう

になつた。牛を屠殺したり皮に引つ付いたに肉はそぎ取つて家を持って帰つてもよかつたし、米袋や粟袋を積卸しをしてこぼれ落ちた物を拾つても文句を言わぬように、大様になつた。初めて收容され、使役中米袋に腰を下ろしてすぐどなられ、土下座させられたころのことが思い出される状態になるのには三カ月とはかからなかつた。日本人の柔順さと勤勉さを目前にするとなつたのか、ソ連兵から朝鮮人の悪口を聞くようになるのにはもの二カ月とはかからなかつた。「朝鮮ダメ、ダメ」と口走つていた。

引揚げのための情報收拾といつても専属の係があるわけじゃないし、また、そんなことができるものでもない。家内たちは野菜を買うにも相変わず官舎の裏手にある支那人の林さんの畑まで買い入れに通つていたし、街の方にもちよくちよく出掛けていたし、いろいろな話を聞いてきた。しかし、引揚げの話の進捗などには何ら手掛りはなかつた。平壤には関東軍の家族なども入れて日本人は、七万か八万ぐらいいるとか、三十八度線を越えるのは沙里院から海州行きに乗り鶴

覬で下車し、徒歩一日掛かりで越える道の地図が入手されていた。これらの事は建設業者で朝鮮語に達者な小松永氏（対馬の人）が知らせてくれた。

正月前であったか、街の日本人集団の老人を主体に鉄道側幹部も含めて百二十九人に平壤への移動が発表された。私が発疹チフスで一カ月「前江界道立病院」に入院、よくなつて退院した直後のことであつた。

鉄道側から「後藤を引率者にせよ」との話が出た。私は病後でその任には責任がもてぬと言つたら、戸板に乗せてでも連れて行くとの話もあつた。また後藤が帰るなら俺たちも一緒に連れて行つてくれとの話が持ち上がった。そこで私は、皆と一緒に帰るつもりだから今回は帰れないとことわつて皆と話し合つた。

この人たちは、結局平壤に引つかかり私どもと一緒に同じころの内地引揚げとなつた。

第一陣が何らの支障もなく、たとえ平壤に集結する結果となつても、日本へ帰る第一歩として残留の江界人に与えた望みは大したものだった。

終戦後、半年経つたころ、街で行き交う朝鮮人も支

那人もソ連兵士も「東京帰りが近づいたね」と言つてくれるようになっていた。私は保安署長さんが官舎に居住されてから、ちよくちよく話を聞きに訪れていた。子守りをしてくれる娘さんはおらんかねとのことで、阿部さんが年頃もいいし、おとなしい性格だったので、両親や本人とも話し合つて署長官舎へ子守りに行つてもらふことにした。そんなこんなで署長さんにも話が通じたし、日本人の移動のとき何ら問題は聞かえてこなつたなどのことを思い、当時としては満ち足りた気持ちであつた。ある日署長宅へ御機嫌伺いに上つたとき署長が「今どうしなさいとも言えぬし、はつきり言つて日本人の他地区への移動、日本引揚げの件について保安署としては何らの権限もないのです。ソ連軍司令官も拘束らしいことを口にしません。だから日本人は就職や日常生活物資など心配ですから、たとえ四人でも五人でも引き揚げられたらどうですか」と言われるので、「そのようにすることにします。有り難うございました」と、おいとまをした。

四、五人ずつでは千八百人の日本人が全部引き揚げ

るには余りにも日数がかかりすぎる。せめて二、三十人ずつでも何とか計画し、最初二十人から始めようと話し合い、実行に移したのが四月に入ってからになった。

私の家内（引揚げ十日前に歯痛から敗血症になり死亡）は父母が朝鮮で長い間生活し、焼酎醸造や印刷業など経営し自身も京城女子技芸学校出身であったし、妹たち三人は朝鮮生まれであった。平常朝鮮人と付き合っていたりしたのでだれなりとお礼を申したい。朝鮮生まれの家内の妹も二人死んだ。一人だけ山形県に生活している。

私が計画した第一団は二十人。班長同村少尉、副班長櫻井少尉。四月二十日黄海道鶴峴へ向かって出発した。第二団は四月二十四日、二十四人班長後藤、副班長飯島少尉であった。局員であるのに軍隊式で少尉と名乗ってあるが、当時、私どもが頼れるのは日本軍だけだったから。

予備少尉である彼らに対する信頼は戦前と変わらな
い。負けたらとはいえ、私の心の底にはソ連何するも

のぞとの思いがあった。引揚げ後国鉄へ再就職し辞職する昭和二十三年中ころまでもその思いは変わること
はなかった。

四月十二日家内の野辺送りを江界の水源地岡にすま
せ十日後、前年九月生まれの双子の姉妹と家内の妹た
ちに背負ってもらい、長女五歳の手を引いて、班長以
下二十四人の責任者として住み慣れた懐かしいトクロ
江の清流と、やさしくしてくれた江界の住民、友人の
支那人らに「有り難う、有り難う」と手を合わせながら、
午後四時過ぎの熙川行最終列車に乗り込んだ。熙川に
八時過ぎ到着するや、熙川機関区始動機関士であった
弟の春水を呼び出してもらった。彼も朝鮮人との交際
も円満であったし、またソ連軍部隊長とも昵懇じこんの間柄
に見受けられていたので、案の定すぐに出頭して来た。
「お前たちも帰らんか、俺が引率者だから何とかす
るよ」と言ったら、「イヤ、兄さんそれは駄目だ。私
は進駐軍にとつて今無くてはならん存在だし、まだ皆
引き揚げてもおらんから、最後まで見届けねばならん
し、有り難いけど、私たちは後で帰るから兄さんたち

は先に帰ってください」とのことだった。

二十四日は熙川で車中泊、翌朝、熙川発平壤午後到着。整列の上、鉄道警備隊の調べを受ける。主として医療器具を持っていないか、持っていれば寄付をしてくれとのこと、切れ物、危険物の所持者はないかなどであった。点検後、私は待合室での宿泊を許可してもらい待合室でまどろんだ。二十六日は副班長と黄金町の、朝鮮政府査察班に出頭し、平壤通過の許しを得て、その裏手にある玉屋に日本人集団事務所を訪ねた。八木江界水電社長の伝言を伝えた。私どもは出発前平壤の日本人集団が、「朝鮮興隆のため引揚げのことを考えるよりも朝鮮発展のため最後の努力をしたい意向だ」ということを察知し得ていた。「しかし、江界においては日本人がいつまでも在鮮し、いろいろな面で迷惑をかけるよりも、一日でも早く引き揚げて朝鮮にはこれ以上迷惑は掛けない方がよいとして、八木社長の伝言のごとく何とかして早く引き揚げられた。またその方法など、この引率者より聞き取らいたい」と申し入れ、日本引揚げなどと公称せず、寒さがつらいので少

しでも暖かい黄海道までも南下させてもらいたいとの運動を展開した方が、早い引揚げにつながるのではないかと進言実行を促した。

三、四カ月過ぎたころ二千人、三千人規模の移動が始まったと聞いている。

私どもが昼過ぎ駅に帰るなり警備隊長が後藤はスパイの容疑がある。すぐ出頭するようにとのことですから二時間近く取り調べを受けた。私はスパイした覚えはないので結局わかってもらえて安心した。「今後もしもいろいろ取り調べを受ける可能性がある。僕の名刺を渡しておく、この名刺を見てなお、検策するようだったら僕のところに戻ってこい」と言われた。名刺はロシア文字で一・二行、名前は「梁甲洙」とあった。

検問の大意は、私が朝起きるとすぐ平壤鉄道局の貨物課長崔順君を尋ねて、今後の便宜供与を依頼したり、平壤駅長の張さんを尋ねたりしたのだから、お前在界中から朝鮮側と連絡取り合ってスパイ行為をしたのだからとのことであったが、崔君は鉄道学校同級生、張さんは一年先輩であったので、戦前と同じく物

を言ったままでと言ったら、「後藤、お前の職務は何が専門だ」と言われ、「防空主任」でしつとしようと、「鮮人と心安く付き合ったり、物を言ったりし過ぎることがどんなことかぐらいお前が一番分かっているはずじゃ」と言われ、その名刺をくださることになったが、平壤を出発して次の下車駅沙里院での検問の際、早速効力を發揮して検問を簡単に、また、丁寧にもらつて驚いた。

平壤出発午後四時過ぎ沙里院着七時ごろ、下車すると「日本人は検問があるぞ」と大声で呼ばれる。「検問の前にこの名刺をご覧ください」と差し出したら、効果については先の通りである。えらい力のある名刺と見えた。

検問が済むと直ぐ様北鮮での最後の列車に乗り換える。我々の目的地は鶴崎である。一時間足らずの行程であつたらう。到着すると停車時間も短いし、夜のこととて皆の確認を一番心配した。列車の出発前になり鉄道警備隊が大声で、「今降りた日本人は全部海州に直行するんだ。また乗車せよ」と呼びながらホームを

駆け回っている。私は団員に「我々は違うのだ。乗車したらいかんぞ」と言い含めながらホームに整列して警備隊の検問に備えた。梁甲洙さんの名刺を差し出したのはもちろんである。検査は丁寧懇切であつた。まず、所持金は千円までであることを切れ物など危険物の医療器具などの取り調べが簡単に行われた。今までの検査で分かつたことは何回か行われる動作の中で特に不審に思つたのは、引率者に対しては実に寛大であつたというより何ら調べられなかつたことである。分らないことだつた。が有り難いことだつた。私は国境線を越えるまで五五五人の名簿、私物、写真全部、位牌、書類など持てるだけの物を無検査で所持した。もちろん切れ物や医療器具などが持つていない。

検問が終了したら早速、鉄道警備隊に頼んで駅舎か待合室で明朝まで睡眠を取りたいと申し入れたら、承知してくれた。しかし、ものの一時間もせぬうちに隊側から依頼があつて、駅前の宿屋を安く交渉するからそこに泊つてもらいたい。そうしないと夜中にソ連兵の略奪や婦女暴行などが心配されるからと、それはそ

れは、敗戦国民には過ぎた待遇で恐縮し、申し出に従うことにして宿屋に宿泊した。ソ連兵からは私らが守って上げると言ってくれた。

八月二十七日の朝警察隊員が来て、これから三十八度線に向かうことになるが、途中いろいろの問題が予想されるのに、心安い案内人を付けるから同行されたらよからうとのこと、二人の案内で出発した。最終地点学校らしいところにある保安隊分所と思われるところに着いたのは、昼過ぎと思われるから鶴峴駅からそう遠くはない。しかし金もなくまた買う店もない朝鮮の田舎道を女子供を連れての道中のつらさは思い余るものがある。

私の長女は五歳だったが、「父ちゃんおんぶしてくれ」と言うので、「弱虫言ったら駄目だ」と孟宗竹の根で作ったステッキでなぐつたら、顔に紫斑が出て来てしばらくは消えなかった。かわいそうにと考えると涙が出る始末だった。十日前に最愛の母ちゃんと死別したばかりだった。

案内人が連れ歩く途中、二度保安隊員らしい者たち

のところを通過する度に検問を受け、若干ずつの金銭を失ったが、どうも保安隊の検問所を全部連れて通り最後には学校らしいところに分駐している分遣隊の検問を受ける仕組みになっているらしかった。私服のそれらの一人は必ずピストルを携帯していた。

分遣隊長らしい人の所には飯島副班長があいさつというか報告に行った。

「ここは三十八度線になっており、海州にいるソ連軍の警戒路線が決められ朝晩歩哨がくるので、なるべく目につかないように控え目の行動を心掛けてもらいたい。また越境は夜間時間を見計らってこちらで示すからそのつもりで善処されたい」と静かに語ってもらった。頭が下がるばかりであった。

裏山の辺で寝ていなさいとのことであったので団員に話し、所在もないので校庭の草むしりでもしようかという話になり、清掃を始めながらいろいろこれからのことなど相談し合った。「班長、これは処遇が良過ぎるが、朝鮮も建国初期であるから、なげなしではあるができるだけの金を出し合って役立ててもらおうじ

やないか」との副班長の意向を皆に伝えたら、五百円集まったので紙に包んで二人で隊長らしい私服のその人のところへ出頭、差し出したら、「そうですか。それは本当に嬉しい、有り難う、有り難う」と言つて受け取ってくれた。ところがその献金ともいえる包みをそのまま私たち二人の前に差し出し、「長年朝鮮で働いたのにこんなことで別れるのは、私たち朝鮮側でも残念に思っている。皆さんに饒別を差し上げたいがどうか受け取ってもらいたい」と言われるので、私もそれを押し載いて団員に返した次第だった。

このとき、隊長に相談があると言われるので、「何でしょう」と伺うと、「実は一週間前に兼二浦の日鉄職員が二十人ぐらい三十八度線を越えたとき、山の中に日本人の老人で病氣の人を一人おいてきたんだ。それから当方で食事、その他世話をしている。私も困っており、できれば貴方がたが連れて行ってくれないか」とのことであったが、「私もそれぞれ荷物もあり、(布団までかついだ者もおる)赤ん坊、小さ

い子供など皆一人前がやつとんで、朝鮮側で担当してくださったら預かってもらいたい」と話したが、どうにもならず断念せざるを得なかった。残念なことだった。夕暮れを待つのに時間をもて余しているとき、平壤のソ連兵站到捕虜になり使役中の日本兵が二人やって来て、同行を願ひ出たので皆に相談し承知することにした。元交通局員の中の応召兵らしかった。荷物かつぎを手伝ってもらうことにした。しばらくすると朝鮮人が案内の売り込みに来たが手数料が高くて頼めなかった。

夕暮れ近くになった。三十八度線を目前にして団員もそわそわし出して一人だけでも越境したいと考える者も出始めたころ、保安隊から「突破は夜中が一番だから、あわててソ連の歩哨に知られたり面倒だから、くれぐれも自重するように」との伝令があった。いよいよ日は暮れた。目の前のリング畑を越えたら米軍の進駐区域だと団員の一人一人が承知しているものだから誰彼となく自然に足は動き出していった。やむを得ないので副班長が先導し、私は一番後から長女の手を引き、

暗闇に吸い込まれるように歩いて行つた。

保安隊の皆さんに頭を下げながらお礼の言葉も口の中で。目標は暗闇にかすむ光、海州か信州か二カ所の明かりの中ごろを直指して、それこそ静・静の行軍であつた。米軍を唯一の頼りに無言の行進を続けるうち、一時間ぐらいたつたらうか、妹たちが近づき、「兄さん、泉さんの赤ちゃんが泣き止まんのであの人たち一家五人に後から来てもらつたらと皆が言う」と言うので、「ここまで来て泉君たちだけ後にするわけにいかん。国境線の様子は私が一番承知しているから私と祝江は泉君たちと帰るからお前たちは先に行け」と言うてやつたら、外の者も黙つて歩くようになった。泉君の奥さんは赤ちゃんを産んだばかり、子供を一人ずつ手を引いておまけに赤子の布団をかついである。「食事も足らなくて栄養失調でお乳も足りんのだ。かわいそうなんだよ」と小さい声で話しあつたら皆も納得したのでらう。

二時間ばかり歩いて、刈後の田んぼに着いたころ、「先頭の者たちはおらんよ」と言い合いびつくりした

が、大きな声を出すわけにはいかんし、こちらでちよ

つと中休みしようと畔に腰を下ろすことにした。金もないから案内は、いらせんと言うのにいつの間にか案内に立つた朝鮮人が、金は後でよいから向こうに渡つたら、「せめて二千元ぐらいください」と申し出ていた。馴れているからと言つたが、やはり先を急ぎすぎ半分だけ連れて行つたと思う。休憩中「もうここまで来たら大丈夫だからね、夜明けをねらつてそれぞれ軍側に歩いて行きなさい。私は泉君たちとゆつくり行くから」と話したがだれも腰を上げなかつた。しばらく休んで元気が出たので田んぼをぬけて、また松林に分け入ることになった。星の薄明かりでしかとはわからん山の中をもくもくと歩く姿は哀れというよりみじめなものであつた。山の中腹ぐらいのところには腰を下ろさせ間近であろう夜明けまでまどろむことにして、間もなく数人の軍靴の足音がガツガツと下の山すそを通るのが聞こえた。私どもは息をひそめて黙っていた。それなのに私が風邪を引いたか大きなクシヤミをしてしまった。その途端、下の方から声が返つてき

た。「おい、日本人だろ、あんたたちの通って来た道でソ連兵に会わなかったかね。私たちは北鮮サラミだ。

ここはもう三十八度線を越えたところだよ、あんた方がおらんようだったと、米軍と保安隊が捜しに行ったよ」、「私どもは日本人だが通って来た所にはソ連兵は一人もいなかったよ」「有り難う。あんた方はすぐ山から下りて部落に出なさい。元気でね」

私どもは山から駆け下りるように下ったが、部落に待っている開城行きが一番列車に乗れたのは大分時間が経過してからだ。

駅に到着したら、「班長がおらんと列車は出せん」と副班長は私ができるのを首を長くして待っていた。しかも北鮮の列車は無職の元鉄道員のため無賃乗車証を発給してくれたから、銭は一銭も持たずとも何百キロの旅ができたのに三十八度以南は「汽車賃を出せ」とのこととこれまたびっくりであったし、三十八度線の日本人の乗車駅はきまつているのか北の地区のほかの引揚列車まで私が引率することになっていた。たしか百十九人であった。

江界での初引揚げの人員も百十九人だった。鉄道関係のない引揚者にパスを発給したのは江界事務所長の有名な栢志海さんであった。

副班長といろいろ話し合って汽車の切符を買い、日本人集団の引率者となり列車に飛び乗り、やっとゆくりしたとき、「班長案内人に銭払ったか」と聞かれ、はぐらかしたと言って米軍に留置され、留置場にいたんだ、「やれやれ無賃案内になってしまったね」と笑い話になった。一時間乗車して米軍基地開城に到着。生まれて初めてのDDT消毒を受け京城の南大門近くのお寺に収容されることになった。

全員無事。前に出発した一班も無事。ここに二泊後、釜山へ。

京城宿泊中米軍一世兵士（軍曹か）飯島君から後藤さんは北鮮との連絡員として残ってくれないかと申し込まれたが、「家内も亡くし子供も三人まだ小さいので残れません」と断った。博多港上陸昭和二十一年五月四日。我々の船に六百人乗船していた。

【執筆者の横顔】

後藤基憲氏は明治四十二年鹿兒島県川内市生まれ、学童時代からわんぱくで小ボスの存在だった。そして狭い郷土で生きるより未開の大陸北鮮で、何と言っても黄色民族は亜細亜は一家であると口ぐせに言っていたが、大正十四年、十七歳で北鮮の平壤に渡り、日給八十八円の朝鮮総督府交通局に採用となり平壤駅の駅手勤務を手始めに、鉄道員養成所電信科を卒業、車掌、駅助役に昇進、昭和十四年には鉄道局書記に任ぜられ、十六年に江界鉄道事務所の防空主任へと累進していった。全く日鮮一如主義主張が、朝鮮人からは誰彼なしに父のごとく、弟のごとく礼をつくして礼に終わる式のやり方が、鮮系民族から慕われ信頼されてきた努力の勤勉家の塊である。

後藤氏が朝鮮北端の江界鉄道事務所にいたときは、ソ連何するものぞと思っていたのに、昭和二十年八月十四日、玉音放送で日本敗戦を知りびっくり仰天した。かく相成った以上は、と直ちに事務を整理した。八月二十五日には鉄道事務所を朝鮮側に完全に引き継ぎ

をし終えた。そして日本人を三十八度線を越えさせて、日本に引き揚げさせなければならぬと判断し作業を手分けして進めた。この機敏に働いた決断と実行は、少年時代から鍛えたボス型精神である。

昭和二十一年に生まれ故郷に引き揚げて以来、農業をやりながら、保線工手、踏切警手、その後は生計維持のため港の舟子、商店の売子、あるいは土工、工場の手伝いと、かつて総督府高等官などという華々しい学位にあつたなどとは、鼻にもかけず働いた人生観は見事である。

昭和五十二年六十八歳で推されて市議会議員に当選以来連続三期当選、世にも珍しい地方議員として職責を全うし、今もなお市老人クラブ連合会長、引揚者団体支部長をつとめ世の人々に人間の生き方の模範を示している人格者である。

(引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)